

## 礼拝のしおり (2020年10月号)

～主の御前に一つにされて～

忍耐と慰めの源である神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせてくださいますように。

(ローマの信徒への手紙 15章 5～6節)



コロナ禍のため、園庭で学年毎の運動会を行いました。年長組ダンス  
(角笛幼稚園)

主の聖名を讃美いたします。いつの間にか、寒さを覚える日が多くなってきました。新型コロナウイルスによる感染の状況が変わりなくある中で、やがて秋から冬へと向かうこととなります。

どこへ行く時もマスクをしたり、訪れた場所で手指を消毒したり、新型コロナウイルスの感染が拡大する中で戸惑いつつ行ってきたことに、いつの間にか慣れて来ている私たちがいるかもしれません。そして、それらのことがいつの間にか普通のことになることを通して、徐々にではあっても日常の生活が戻りつつあるように感じている人は少なくないのではないのでしょうか。

ただ、日毎に伝えられる感染者数を見る限り、収束に向かっている兆候は見えません。このような状況が続く中で、私たちはどのように歩んで行くべきなのか。私たちの日々の歩み、また教会の歩みにおいても、祈りつつ話し合い、判断して行かねばならないことを思います。

学校関係で言えば、大学ではまだオンラインでの授業が続いている大学が多いようですが、高校では通常の授業に戻りつつある学校も多いようです。しかし、そのような中で、新型コロナウイルスへの感染を恐れて「自主休校」をしている子どもや若い人々が日本全国に少なからずいるということを、ニュース番組を通して知りました。学校がオンライン授業から通学しての対面授業に切り替わっても、感染の恐れを覚えて、通学しない日々を続ける生徒たちがいるということです。そこには、生徒本人や親が基礎疾患を持っていたり、高齢の祖父母と同居していたり、それぞれの状況の中で、感染して入院することへの不安や死への恐れが深く関わっているようです。

感染の不安を全く持っていない人など誰もいないだろうと思います。しかし、新型コロナウイルスによって生じた状況が続く中で、それぞれが抱えている不安の大きさにかかなりの幅が出て来ているのではないのでしょうか。普通の生活に近づいていると感じる人もいれば、今の状況がいつまで続くのかと思い、かえって不安が大きくなっている人もいるのではないかと思うのです。

高井戸教会では、6月下旬から、日曜日の礼拝を、第一礼拝と第二礼拝という形で2回に分散して行うようになりました。礼拝に出席する者は、受付で手指を消毒し、礼拝中も基本的には皆がマスクを着け、窓や扉を開けて換気をし、時間的にも通常よりは短い礼拝を捧げています。それが、今現在の状況を踏まえての暫定的な形であることは言うまでもありません。しかし、いつ従来の形に戻すことができるのか、その判断は慎重でありたいと思います。必ずしも自分の感覚で捉えず、自分よりも不安の大きい人たちのことに思いを向けたいと思うのです。「わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません」(ローマの信徒への手紙 15章 1節)。そのように語る聖書の御言葉を心に留めます。

ある教会の牧師が、『教会が一番安全な対策を取っている』、訪れる人からそう思ってもらえるようにしたい』と語っていました。少なからぬ不安を抱いている人たちをも、教会へと招き、できるだけ不安を抱かずに教会を訪れてほしいからです。

今の状況が続く中でも、主イエスが多くの人を招かれるその御心をどのように表すことができるか、教会全体で祈りつつ考えていきたいと願っています。

◎10月18日以降の主日礼拝の予定

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21
10月18日(日)	エゼキエル書 34章 11～16節 マタイによる福音書 9章 35～38節 「収穫の主への願い」	詩編 23編	351, 459, 513, 28
10月25日(日)	申命記 7章 6～8節 マタイによる福音書 10章 1～4節 「十二弟子の選び」	詩編 115編	353, 57, 515, 29
11月1日(日) 献堂記念礼拝	イザヤ書 52章 7～10節 マタイによる福音書 10章 5～15節 「主イエスに遣わされて」	詩編 16編	464, 390, 458, 26
11月8日(日)	出エジプト記 4章 10～12節 マタイによる福音書 10章 16～23節 「主イエスが来られる日まで」	詩編 51編	457, 531, 346, 27

☆10月18日～11月8日の主日礼拝、その他について（お読みください）

新型コロナウイルスの感染防止を考慮しつつ、10月18日～11月8日の高井戸教会の主日礼拝、その他の諸集会については、以下のとおりいたします。

◎主日礼拝について

現在、主日の礼拝を、第一礼拝（午前9時30分開始）と第二礼拝（午前11時開始）の2回に分けて行っています。礼拝堂での礼拝に出席希望の方は、いずれかの礼拝にご出席ください。礼拝出席者は受付で手指の消毒をし、可能な限りマスクの着用をお願いします。また、礼拝堂の中で互いの距離を保って着席していただくために、ベンチに赤いシールと白いシールを貼っています。第一礼拝に出席された方は赤いシールのすぐ後ろの席に、第二礼拝に出席された方は白いシールの後ろに座っていただきます。その他にも、礼拝後の礼拝堂からの退出の仕方等、ご協力をお願いしていることがあります。感染防止を考えてのことですので、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

なお、健康等の理由やそれぞれのご事情から礼拝出席をためられる方々は、どうぞ無理をなさらず、ご自宅でお祈りください。また、礼拝出席を希望される方も、当日、ご自身で体調をよく確認し、少しでも不安がある場合は、ご自宅でお過ごしくださるようお願いいたします。

今後も、「礼拝のしおり」の発行を継続します。また、主日礼拝における説教の動画も、引き続き教会ホームページから見られるようにいたします。

また、11月1日に行われる献堂記念礼拝は、5月から延期されることになった召天者記念礼拝を兼ねて行われますが、今回はご遺族の方々をお招きすることは断念せざるを得ないと判断しました。どうぞご了承ください。

◎子どもの教会、その他の諸集会について

子どもの教会は、幼小科は現在休止中ですが、中高科は毎月1回のリモートでの礼拝と交わりを行っています。

現在のところ、10月中も多くの集会は中止となる見込みです。再開する集会がある場合は、週報や教会ホームページを通してご確認いただけるようにいたします。

◎臨時教会総会について

10月25日(日)第一礼拝後（午前10時20分より）、臨時教会総会を開催し、長老選挙を行います。高井戸教会の現任陪餐会員である方はどうぞご出席ください。当日、第一礼拝に出席される方はそのままお残りくださり、また第二礼拝に出席される方は早めにいらして臨時教会総会にぜひご出席くださいますようお願いいたします。なお、詳細は、教会員の方々に配付しました「臨時教会総会に関するお知らせ」をご覧ください。

**「罪人を招くために」（マタイによる福音書9章9～13節） 牧師 七條真明**

マタイによる福音書第9章9節以下には、主の12弟子の一人であるマタイがどのようにして主に従っていき者となったのか、弟子マタイの召命の出来事が記されています。

「イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、『わたしに従いなさい』と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った」（9節）。

ここに述べられているのは、主イエスが収税所に座っているマタイを見かけられたということ、そして主がマタイに「わたしに従いなさい」とおっしゃったこと、それでマタイは立ち上がってイエスに従ったということです。ある意味で、実に簡潔に記されています。

主イエスの12人の弟子たちは、やがて生まれてくるキリスト教会において中心的な働きを担うことになった「使徒」と呼ばれる人々として、やはり特別な人々だと言うこともできます。しかし、この12人の弟子たちの姿、呼びかけられ、招かれて、主の弟子となった彼らの交わりは、キリスト教会の原型となるものが既にここで生まれているということが出来るのです。

キリスト者は誰でも、自分の周囲に生きる人たちから「どうしてキリスト者になったの？」という質問をされたことがあるだろうと思います。私自身も、かつてはその経緯として自分が捉えているところを話したりしていました。しかし、ある時から、そのようにいくら経緯を語っても、それですべてが尽くされる訳ではない、そのような思いを深く抱くようになりました。いくら詳細にその経緯を語っても大事な部分が欠け落ちている。キリスト者である者は誰でも、やはり主イエスがこの自分に目を留めてくださり、「わたしに従いなさい」と呼びかけ、お招きくださり、その呼びかけを聞いて、主に従っていくことになった。そうとしか言えないもの、そうとしか説明できないものがあるのではないのでしょうか。

マタイを主イエスをご覧になった時、彼が祈りを捧げているところをご覧になった訳でもないことをまた心に留めます。なかなか立派な信仰に生きている、見どころのある奴だ、わたしの弟子になりなさい、と主イエスがおっしゃったのではないのです。マタイは収税所に座っていました。徴税人でした。当時のユダヤの社会では、自分たちを支配するローマ帝国のために、せっせと税金を集め、自分も大きな儲けを得ている罪人同然の者、それが徴税人でした。主イエスは、そのような徴税人マタイを弟子の一人として選ばれたということです。

教会は罪人の集まりです。私たちは、教会では自分が特別な者であると誇る必要はありません。また、他の人より人一倍駄目で卑しい人間なのだとうずくまる必要もないのです。ただ、主イエス・キリストが、私たち一人ひとりを御心に留めてくださり、「わたしに従いなさい」と呼びかけてくださった。だから、主の弟子として、今日も教会に生きている、生かされているのだということです。

マタイによる福音書第9章9節以下が語る、主の12弟子の一人マタイの召命の出来事は、マルコ福音書やルカ福音書にも記されています。しかし、なぜかその徴税人の名前は、「マタイ」ではなくて「レビ」となっています。マタイの別名であったとも考えられる名前が用いられている。しかし、マルコやルカに記される12弟子のリストには、「レビ」という弟子の名前を見出すことはできません。「マタイ」です。けれども、マタイによる福音書では、弟子マタイの召命の出来事において、その名が「マタイ」と記され、12弟子のリストが記される第10章1節以下、その3節には「徴税人のマタイ」と記されているのを見出すのです。

なぜであるのか。これは、マタイによる福音書をマタイが書いた時、自分が徴税人であったこと、人々から罪人と蔑まれていた者であることを隠さないで、収税所に座っていて弟子となった者がこの自分であることをはっきりと「マタイ」とその名を記すことで表した。また12弟子のリストにおいても、ただ「マタイ」とは記さず、「徴税人のマタイ」と記して、自分が徴税人、罪人であったことを記した。罪人である自分を、主イエスが御心に留めてくださり、「わたしに従いなさい」と呼びかけ、弟子としてくださった。十字架の罪の赦しがほかでもないこの自分のためのものであり、主は罪人である者をお招きくださる。その恵みを言い表したのです。